

「磐梯高原の地形 (1)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

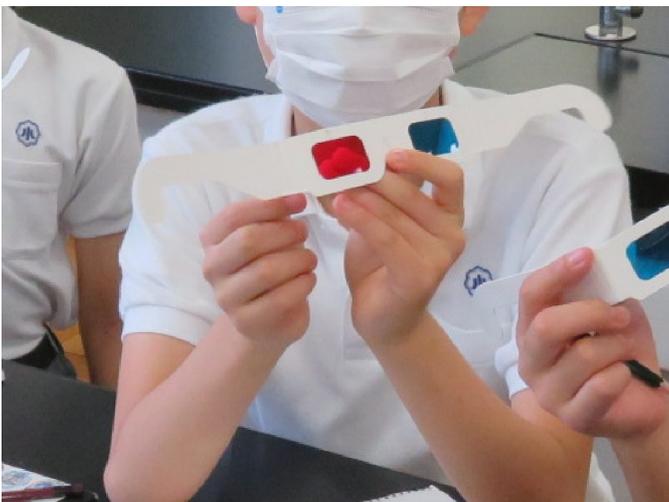
お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーション研究所 研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

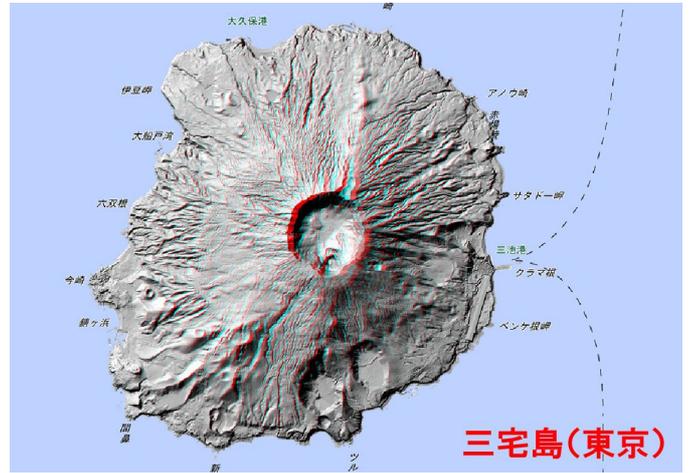
日本列島は、火山活動や造山運動が盛んで、降水量(雨や雪の量)も多いので、非常に多様な地形を有している。すべての地形を読み解いて、その由来を学ぶのは不可能だが、流水がつくる地形、火山がつくる地形については、それぞれ5年・6年で学ぶことになっている。地形はもちろん現地でも観察するのが一番良い。しかし、それはなかなかできないことだろう。そこで役立つのが地形の立体視「アナグリフ」である。



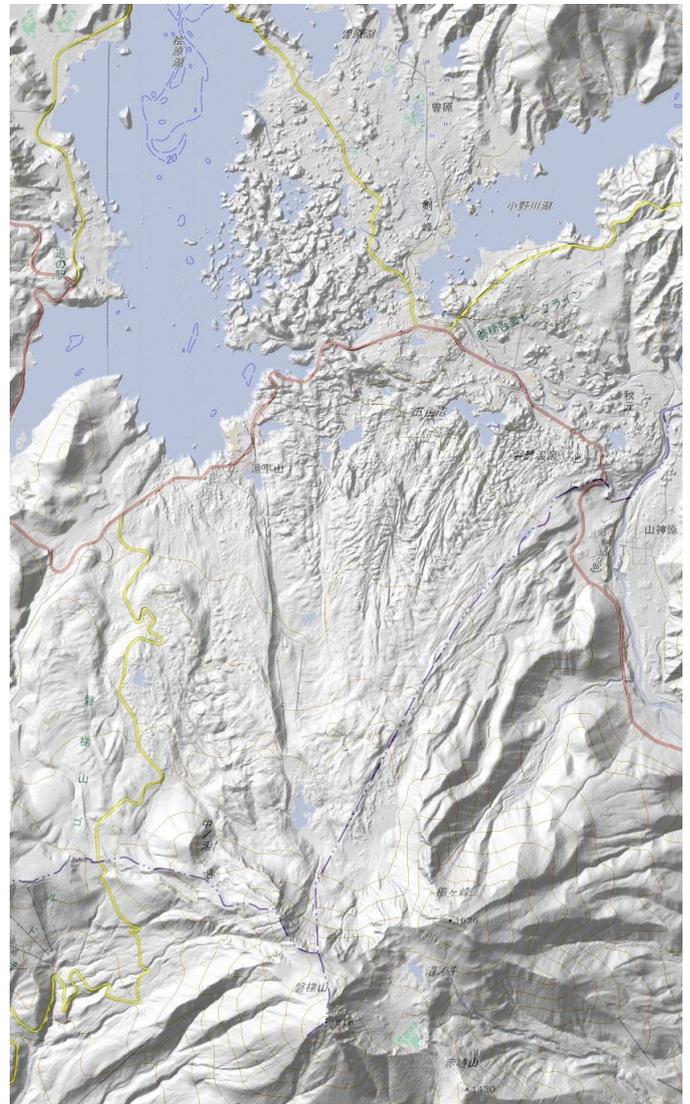
上図は、多摩川上中流域(青梅市付近)の立体地形図(アナグリフ)である。このままでも川の「蛇行」の様子や「河岸段丘」の地形はある程度読み取れる。



しかし、このような「アナグリフ・メガネ」を使用すると、地形が立体的に見える。単なる陰影地形図が、まるで石膏模型のように浮き上がって見えるのだ。



アナグリフによる立体視は、火山地形にも威力を発揮する。図は三宅島のアナグリフ画像だが、メガネをかけて見ると、山頂火口、側火口、それに噴火後の侵食谷の様子も、立体的に読み取ることができる。



1学期に6年生が「磐梯高原林間学校」に出かけた。上図は、6年生が活動する磐梯高原(裏磐梯)の立体陰影図だ。これをアナグリフ化して、林間学校の事前学習に活用しようと考えた。